

短期語学留学生受け入れによる波及効果と今後の展望 —ミンダナオ国際大学生の受け入れを通して—

The Effect and Further Prospects by Accepting Short-term International Students
—Accepting of Mindanao Kokusai Daigaku Students—

清水 和 久
Kazuhisa SHIMIZU

〈要旨〉

提携校であるフィリピンのミンダナオ国際大学から本学に初めて日本語短期語学研修生6名を1ヶ月間受け入れた。留学生には、あらかじめ用意された日本語講座や日本文化交流会に参加してもらう傍ら、本学の授業や、学生が独自に企画する交流会にも参加してもらった。留学生は英語の他に日本語も話せたので、本学の学生との交流も活発に行われた。この1か月間の留学について、留学生及び留学生とかかわった日本の学生にアンケート調査を行った。その結果、留学生からは日本人に対する印象が良くなったという感想があり、日本の学生からは交流会や協働学習を通して英語の必要性を強く感じ、フィリピンの学生の方やフィリピンの国に対してより興味を持ったという感想を得られた。わずかな数の留学生の受け入れではあったが、日本の学生との交流形態を工夫することで、本学の学生が多くの影響を受けることができたので、留学生受け入れの効果が大変高いことがわかった。

〈キーワード〉

国際交流、協働学習、短期語学留学

1 はじめに

グローバル人材の育成を目指し、在学中に海外留学のチャンスがあることをセールスポイントとする大学が多くなってきた。本大学においても、長期/短期語学留学制度が2年前からスタートしている。しかし、大学が学生を留学生として送り出すだけは日本の大学側の費用の持ち出しとなるため、最終的には海外からも交換留学として学生を受け入れて授業料を相殺する形で提携することが望ましいと考える。しかし、日本の学生の留学目的が語学取得である場合にはどうしても、アメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスなど費用が多くかかる欧米地域への留学希望が多く、費用が安くて済むアジアの地域への希望は少ない。もっとも、これは当然で、英語を習うにはネイティブスピーカーがいる国に行くことは理にかなっている。逆に日本への留学希望は欧米地域からよりは、アジアの地域からのほうが多い。同等数の交換留学を成立させて授業料相殺をねらうには、どちらの場合にもうまくいかない。

外国から留学生を呼ぶためには、単位互換を可能し、日本の大学の授業が英語で行われ、日本語ができなくても授

業を受けられる体制が必要である。ただし、外国から日本に来る留学生が日本語の習得を目指している場合にはこの限りではなく、日本語の講座や日本文化に関わる講座が準備されていればよいことになる。本学では、平成28年度から留学を前提とする新学部が立ち上がる予定であるが、そのために海外留学のための提携大学を求めている。できれば日本から行くだけではなくて、提携先からも学生を交換留学生として受け入れる必要がある。

筆者は、平成25年度に「国際ボランティア講座」を開講し、関連講座として平成25年9月に「国際ボランティア演習」をフィリピンで実施した。⁽¹⁾主な活動は孤児院（ダバオオリエンタル州）での活動であったが同時にダバオ市のミンダナオ国際大学（以下MKD）との交流もおこなった。この交流が縁で同年12月に本大学はMKDと大学間交流の提携を結び、平成26年2月には短期語学留学生を5名送り出している。また、同大学と遠隔交流プロジェクトである「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」⁽²⁾を実施、平成26年3月には共同で壁画を完成させている。

このような経過を経てMKDとは学生同士の交流を中心

に1年間交流を続けてきた。MKDは日本にいくつか提携大学を持っており、skypeによる交流や、語学留学の受け入れを行っている。しかし、これまでMKDから直接日本の大学に日本語を学ぶための短期留学は実現していなかった。

今回MKDから1か月間の短期留学生を交換留学生として受け入れることとなった。今回の受け入れにあたり、本学が受け入れる上での準備態勢や、本学の学生に対する波及効果、留学生自身の変容などについて言及する。なお、同時期にロシアからも留学生を受け入れているが、本研究では筆者が関わってきたMKDの留学生を研究対象とする。

2 研究の目的

MKDの学生との交流プログラムの概要と、それが日本の学生に与えた影響、およびMKDの学生の意識の変化を明らかにする。調査対象は以下の2つの交流プログラムとする。

- 1) 学生交流企画
- 2) 国際ボランティア講座における協働学習

最後に今後の留学生受け入れにおいて有効な学生交流プログラムについて提言する。

2 研究の方法

2-1 受け入れプログラムの作成

プログラムは本学国際交流センターが中心となって計画。内容は午前の1限目が日本語教育プログラム、その後2コマほど本大学の講義への参加である。その他、日本文化体験のための近隣県へ小旅行、日本の祭りへの参加、小学校訪問などを中心としたプログラムとする。

2-2 SJP学生交流企画の内容とアンケート調査の実施

昨年からMKDと交流している「星稜ジャンププロジェクトスマイルキャラバン隊」(SJP)の学生がMKDの学生との交流を企画。交流を希望する本学一般学生に呼びかけ交流を実施する。

実施後、参加の学生とMKDの学生に対してアンケート調査を行う。

- ・実施回数 5回
- ・対象 MKDの学生6人 日本の学生13人
- ・学生企画の内容

交流会は1回90分。予約制で行い、前半は仲良くなるためのゲームや話し合いをおこない、後半はMKDの学生と1対1の英会話をおこなう。

表1 学生企画プログラム

回	前半の内容「企画」	後半の内容「英会話」
1	英語での自己紹介	英会話練習
2	討議) 交通, 食べ物	英会話練習
3	討議) 宗教, 法律	英会話練習
4	連想ゲーム	英会話練習
5	伝言ゲーム	英会話練習

- ・アンケート内容

表2 MKDの学生用アンケート項目

- ① 日本人との交流で変容したこと
- ② 良かった点
- ③ 企画した日本の学生に対する印象

表3 本学の学生に対するアンケート項目

- ① フィリピン人との交流で変容したこと
- ② 良かった点
- ③ フィリピンの学生に対する印象
- ④ 交流しての感想

2-3 国際ボランティア講座の実施とアンケート調査

国際ボランティア講座受講の学生は、講座後、国際ボランティア演習に参加し実際にフィリピンに行き、MKDの学生と現地で交流することになる。講座においてフィリピンのことを事前に調べており、本交流は直接フィリピンのことを質問できるよい機会である。また「アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト」を今後実施するため、模擬的にプロジェクトを授業において実施する。実際に下書を作成し協働制作をおこなう。終了後、日本の学生とMKDの学生にアンケート調査を行う。

- ・授業回数 3回
- ・対象 MKD学生6人 日本の学生19人

表4 国際ボランティア講座での交流内容

	講義の内容
1回目	「グループ別自己紹介、フィリピンに関する質疑」 自分たちが調べたフィリピンの情報について紹介し、不明点をMKDの学生に質問する。本学の学生は実際に9月にMKDに訪れるのでMKDの学生と話す機会は貴重である。
2回目	「模擬アートマイルプロジェクトの実施」 本来ネット上で話し合う内容を面接で事前に練習 互いのアイディアを出し合って1つの形ある壁画の下書きとする。
3回目	「模擬アートマイル作品の下書きの完成と発表」 下書きを完成させ、内容についての説明をパフォーマンス付きで発表する。

表5 日本の学生に対するアンケート項目

① 授業前のフィリピンのイメージ
② 授業後のフィリピンのイメージの変容
③ これからの自分が力を入れること
④ フィリピンについて新たにわかったこと
⑤ 授業において楽しかったこと
⑥ 全体の感想

3 研究の結果

3-1 受け入れプログラムの作成

表6 留学生受け入れプログラム

	19(月)	20(火)	21(水)	22(木)	23(金)
1	あいさつ	日本語	日本語	金沢市内 観光	日本語
2	校内紹介	文化体験	学生交流		SJP①
3	プレテスト		図書館		プレゼン
4		文化体験	授業参加		
5	歓迎会				

	26(月)	27(火)	28(水)	29(木)	30(金)
1	日本語	日本語	日本語	輪島観光	日本語
2	プレゼン	授業参加	旅行説明		SJP③
3	授業参加		和菓子体験		文化体験 着付け
4	SJP②	授業参加			
5	国際ゼミ①				

	2(月)	3(火)	4(水)	5(木)	6(金)
1	日本語	日本語	日本語	日本語	白川郷観光
2		授業参加		小学校訪問	
3		学生交流	文化体験		
4	SJP④			旅行説明	
5	国際ゼミ②			授業参加	

	9(月)	10(火)	11(水)
1	日本語	日本語	日本語 プレゼン
2		小学校訪問	
3	学生交流		
4	SJP⑤		
5	国際ゼミ③		お別れ会

基本的には1日5コマで18日間。90コマの枠がある。ほぼ毎日1限目に日本語講座があり、1週間に1回は観光地巡りを実施した。日本語講座は講師の予算の関係で1日1

コマしかとれなかったが、終了後もっと増やして欲しいとの要望があった。

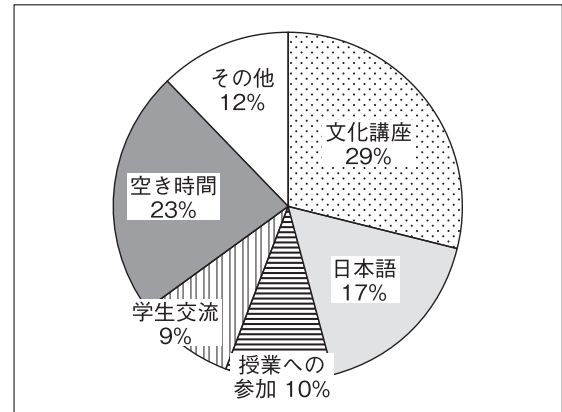


図1 受け入れプログラムの内容の割合

学生交流は全部で8回、そのうち5回がSJPが主催する会であった。また授業参加は9回でそのうち協働学習を行った国際ゼミ（国際ボランティア講座）は3回であった。以下SJP主催の学生交流と、筆者が行った国際ボランティア講座についてのアンケート結果を示す。

3-2 SJP学生交流企画の結果

3-2-1 MKDの学生のアンケート結果（N=6）

① 日本人との交流で変容したこと（すべて記述）

- A 交流することで、私の人生と日本に対する見方を変えた。すべての人々が自身の文化や言語を愛せば、どれだけ素晴らしい国が気づくことができる。日本の人々をより深く理解できた。
- B 日本人はとても冷たいと思っていた。でも友達になることで、その態度は恥ずかしさから来るものだと気がついた。日本人はとてもやさしくあたたかかった。
- C 日本人はとてもシャイだと思っていたが会話が始めると個人の生活でさえ話すほど親密な仲になった。
- D とても親切でとても好意的だった。
- E 日本の学生はシャイだと思っていたが話してみるととてもフレンドリーだった。
- F 最初は外国人に対して厳しく「冷たいという印象があったが、日本人とのコミュニケーションを通してその印象は消えた。日本人は親切で一緒にくつろげた。

② 良かった点

- ・英語だけでなく文化などについても話すことができたので楽しかった 2人。
- ・ゲームはおもしろかったし友好関係を深めることができた 3人。

③ 企画した日本の学生に対する印象

- ・ とても熱心に取り組んでいる印象がある 3人
- ・ とても親切である 2人
- ・ 責任を持って活動をおもしろくしようとして 1人

3-2-2 日本の学生のアンケート結果 (N=13)

① フィリピン人との交流で変容したこと

- ・ 外国に興味を持つようになった 6人
- ・ 英語を話すことに自信がついた 5人
- ・ 積極的になった 1人
- ・ その他 1人

② 良かった点

- ・ ゲームを通してコミュニケーションがとれた 4人
- ・ 身振り手振りで伝えられた 2人
- ・ フィリピンに詳しくなった 2人
- ・ 1対1の会話で仲良くなった 2人
- ・ その他 3人

③ フィリピンの学生に対する印象

- ・ 人がとても親しみやすい 9人
- ・ いい意味で変化なし 2人
- ・ その他 2人

④ 交流しての感想

- ・ 英語の必要性をととても感じた 4人
- ・ 今までにない経験で視野が広がった 4人
- ・ とても新鮮で楽しかった 2人
- ・ 日本のアニメの人気があることがわかった 1人

3-2-3 アンケート結果の分析

MKDの学生の日本人学生に対する印象の変化が大きく感じられる。これは学生企画の交流だけの印象ではないと思われるが、MKDの学生は日本語や日本文化をフィリピンで学んできてはいるが、日本人に対する印象は外見の表現力のなさからイメージ的にはあまりよくなかったと思われる。しかし実際に日本人と1対1で交流することでその印象が変わった事がわかる。

また、過去においてフィリピンは日本に4年間占領されていた時代があった。MKDが位置するダバオには戦前2万人の日本人が住んでいた。そのためフィリピンには日系2世が多い。日系2世は日本が戦争で負けた後、迫害の対象とされ経済的にも難しい位置に追いやられた⁽³⁾。

日系3世の世代になり、経済的に豊かな日本で働くチャンスに恵まれ、経済的地位も上がりつつある。しかし日本に対して良い印象を持たないフィリピン人がいる中で育っ

たMKDの学生もいるため、今回の留学で日本人に対する見方が変わったとすれば交換留学の1つの成果といえる。

一方本学の学生にとっては、MKDの学生と1対1で英会話をおこなったり、ゲームで交流をしたりすることで、外国人とコミュニケーションをとることに自信が持てるようになった。また、フィリピンに対しての興味も増している。それはMKDの学生がとても社交的であり、親しみやすかったことにも関係している。

実際に外国人と個人的に交流することで英語の必要性も感じ、視野が広がったと感じている学生が多い。これは外国人と交流すれば当たり前のことであるが、このことに大学生で気がついたと言うことはこれまで外国人との個人的な交流の機会があまりなかったことを意味している。

このことから外国の留学生を本学に受け入れる事の必要性を感じることができる。

3-3 国際ボランティア講座の実施とアンケート調査

大学の授業「国際ボランティア講座」にMKDの学生が参加。MKDの学生を1人ずつ含む6つのグループで絵の原画を考える協働学習を実施。授業後に、日本の学生に対してアンケート調査を行った。

3-3-1 作成した壁画の作品

表7 6つのチームの壁画のテーマと解説

	テ ー マ	内 容
A	日本とフィリピンの子どもの未来	フィリピンと日本の子どもたちを両国のおとなが手を伸ばして悪いことから守っている。国境を越えて守ることをあらわしている。子どもの未来を今作ろう!
B	手をつなごう	太陽に向かって歩く子ども達は明るい未来に向かっていていることを表している。各国を代表する動物や果物で文化を、衣装の鳩で平和を、手をつなぐことで共同を表している。
C	ISLAND	同じ島国でアルという特徴を生かして、両国が手をつないで偏見をなくして、堅く強い関係を築くことにつながる。また協力することで平和や愛や友情が生まれる。
D	The best thing in life is happiness.	おまつりは伝統と文化の象徴。互いのお祭りを通してhappyな気持ちになろう。
E	みんなと空の下	戦争を経験し大変なときもあったけどこれからは手を取り合ってがんばっていこうと言うことを表している。
F	ハーモニー	両方の国旗をモチーフにし、互いの国の事を描いた絵。



図2 Bチームの作品「手をつなごう」



図3 Eチームの作品「みんなと空の下」

互いの国を象徴する動物や果物等が対比的に描かれている。絵が苦手な学生も作画の時にはタブレットPCで画像を検索しながら描いていた。右側が日本で富士山を描けば左側はフィリピンで有名なアボ山を描いている。壁画のデザインはこのように対比的になることが多い。(Bチーム)

MKDの学生は時間に厳しいに日本人のイメージを時計に例え、鳥居と扇と共に右側に描いている。一方日本の学生はフィリピンのイメージをバナナに例え、キリスト教の十字架とモンキーと共に左側に描いている。相手の国のことを互いに描くと相手の国に対して持っているイメージがわかっておもしろい。(Eチーム)

このように国が違い、文化的な背景の違う学生同士がアイデアを出し合って英語を使いながら1つの作品を作りあうことで協力する楽しさと達成感を味わうことをねらいとした活動を行った。

3-3-2 日本人に対するアンケート調査の結果 (n=19 重複回答あり)

① 授業前のフィリピンのイメージ

バナナの栽培	4人
経済格差がある	4人
日本の占領地	1人
観光地がない	1人
無回答	8人

② 授業後のフィリピンのイメージ (人, 国に対して)

○フィリピン人に対して	
フレンドリーで積極的	9人
日本の事をよく知っている	5人
語学力がある	2人
小柄な人が多い	1人
○フィリピンの国に対して	
自然が豊かで観光地が多い	2人
みんなスマホを持っていて発展している	2人
アジアだけど日本と文化が異なる	1人

③ これから自分が力を入れたいこと

英語力をつける	14人
日本の文化を語れるようになる	9人
パフォーマンスとしての特技を持つ	4人
積極性を持つ	4人
フィリピンについてもっと知る	3人
笑顔で対応する力	3人

④ フィリピンについて理解したこと

伝統文化	8人
食文化	4人
祭り	2人
衣服	2人
治安	2人
自然／観光地	2人
宗教	1人

⑤ 授業において楽しかったこと

文化の違う相手といっしょに考え、形にすること	12人
アイデアを出し合うところ	2人

⑥ その他の感想 (抜粋)

- ・「メンバーで協力しながら1つの作品を作り上げていくことがこんなにも楽しいとは思っていませんでした。互いの国を理解しながら仲も深められるというのがすばらしいところだと思います。またこのような機会があればやってみたい。」(A子)
- ・「外国の人としっかり交流したのが初めてだったこともあり戸惑うことや思いを伝えきれなかったりしたことがあった。悔いはあるけれど授業はとても楽しく貴重な体験ができてうれしい。アートマイルは最初はどうなることかと思ったけどみんなで話しあい、楽しくよい物が作れたのでよかったと思う。」(B子)
- ・「交流を通して知らないことがたくさんあるとわかった。他の国の人とコミュニケーションをとることが自信につながると感じた。」(C男)
- ・「グループの人と仲が深まって楽しかった。絵でみんながつながるということはすばらしいことだと思った。もっと続けていきたい。」(D子)

MKDの学生と3回の授業で作品を仕上げたわけであるが、授業前には日本の学生はフィリピンに対しては、バナナや経済的に貧困であるというイメージしか持っていなかった。しかし授業後は、まずMKDの学生と話しあうことでその積極的に明るい人柄に惹かれている。彼女たちの英

語は発音もきれいでわかりやすい。アルバイトとしてskypeなどをつかって日本人に英語を教えている学生もいるとのことであった。それに歌や踊りも上手く何事に対しても積極的である。その人物からの情報なのでフィリピンの国に対しても良いイメージを日本の学生は持っている。

また、③の「これから自分が力を入れたいこと」をみるとMKDの学生との交流を通して良い影響を受けていることがわかる。英語の必要性や自国文化を語る事の重要性に気づき、アピール力などもつけたいと思っている。MKDの学生は日本の事をよく知っており、6月頃に話題となっていた集团的自衛権について「憲法9条との兼ね合いについてどう思うか」という質問を日本の学生にするくらいであった。

次に壁画の構図を通してフィリピンの文化についてもたくさん学び、知識が増えている。これは異文化理解として大切である。

最後に何よりも学生の評価が高かったのが、MKDの学生と共同でアイデアを出し合いながら1つの作品をつくるプロセスであった。まったくの異文化を背景とする相手と話し合い、建設的合意点を見いだして1つの作品にするということはとても高い達成感を感じることができると思われる。その他の感想の所でも作品を完成させたことに言及している感想に説得力がある。

4 まとめ

今後のグローバル人材の育成を考える上で、日本の学生が海外に留学することが有効であることに変わりはないが、逆に留学生を受け入れる事でも本学の学生に与える効果が大きいことがわかった。留学生自身の日本語能力の向上と日本文化の理解はもちろん重要であるが、本学の学生と関わりをつくることでさらなる効果が期待できる。この

場合の関わり方として第1にパーソナルな交流ができること、第2にグループで協力して達成感を味わえる活動があることの2つの要素が必要であることがわかった。

今回、アンケート調査を行ったのが、学生の交流企画と、筆者自身の授業であった。ここから考察するに、1つ目の学生の交流企画は1対1で行う英会話がセットされていたため、参加した学生は直接留学生と十分話すことができ、何とか意志を通じさせようと努力した。そのため、満足度は極めて高く、英語の必要性を身をもって感じることできたはずである。留学生が英語に堪能な場合、それだけで本学の学生にとっては魅力のあるものとなる。英語の上達に役立つという面もあるが、コミュニケーションの手段としての共通語の意味を理解できることになるからである。

2つ目の「グループで協力して達成感を味わえる活動」であるが、留学生と日本の学生が力を合わせなければできない調査、話し合い活動やプレゼンテーション活動を組み込むことで外国の学生と力を合わせることの重要性を学び、可視化できる成果物を作成することで達成感を味わうことができる。これがまさに交流の醍醐味であろう。

以上の2点の要素を盛り込んだ交流を日本の学生との間に仕組むことによって本学の学生に英語の必要感を感じさせるとともに、外国に目を向けることの重要性を理解させることが可能になる。

留学生と交流させる仕組みを上手く作ることによって、本学の学生への波及効果を高めることが可能となる。

最後に、会ったときだけでなく、その前後にその当事者と遠隔におけるプロジェクトを走らせておくことさらに会ったときの効果、その後の効果が高くなる。今後ともMKDとの交換留学を続け、さらにフィリピンにおける提携校も増やし、たくさんの交換留学生を本校に呼び、本学の学生に海外に目を向けるチャンスを増やしていきたい。

注

- (1) 国際ボランティア講座開設の意義と実際の展開 ―フィリピン国際ボランティア演習を通して― 清水和久 金沢星稜大学人間科学 第7巻第2号 pp29-37
- (2) ジャパンアートマイル <http://www.artmile.jp/>
- (3) ハボン ―フィリピン日系人の長い戦後― 大野俊 第3書館 1991.8

参考文献

文部科学省平成21年度国際開発協力サポートセンター・プロジェクト グローバル人材育成のための大学教育プログラムに

関する実証的研究 報告書（第2版）
第1部 海外ボランティアと教育プログラムの融合事例
第4章 摂南大学 外国語学部 浅野研究室 p35